

遊漁者ニーズ対応型アユ種苗利用研究

(予算区分：県単 研究期間：平成 22～24 年度)

担当：水産技術研究所 富士養鱒場 鈴木勇己

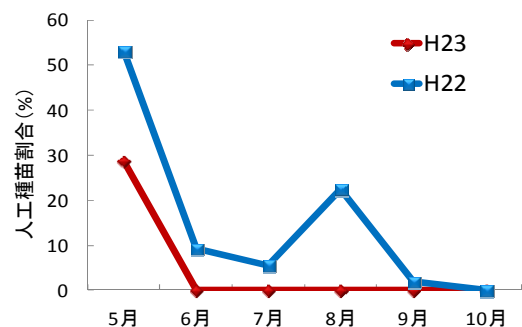
【研究の背景とねらい】

- ・静岡県は、天然アユに恵まれ県内外から多くの遊漁者が訪れますが、近年、遡上の遅れや質の低下（縄張りを形成しない）が問題でアユが釣れなくなり、遊漁人口は減少しています。
- ・そこで本研究では、人工種苗について放流後の釣獲特性や経済効果を明らかにすると共に、再生産の可能性についても言及し、人工種苗を用いた漁場管理のモデルケースを検討します。

【これまでに得られた成果】

(H22 年度の成果)

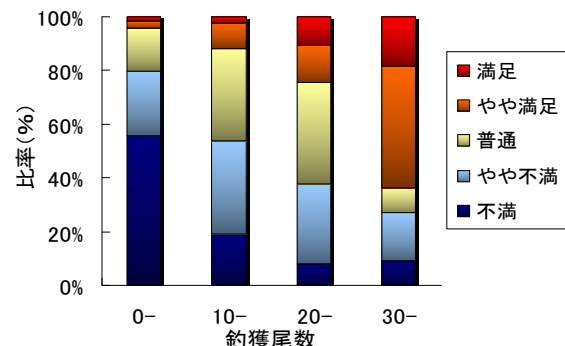
- ・人工種苗は解禁当初によく釣れ、10 月には漁場からいなくなっていることが確認されました。また、人工種苗由来の流下仔魚は全体の 0.03%であり、再生産に関与する可能性は極めて低いことが示唆されました。
- ・遊漁者アンケート調査では、解禁直後や晩期に県外遊漁者が多いこと、釣獲尾数の多さが満足度へ大きく貢献すること、種苗放流を継続するべきとの意見が 8 割を超えることなどが明らかとなりました。



釣獲アユ中の人工種苗の割合
(5 月の解禁当初に割合が高い)

(H23 年度の成果)

- ・H22 年度と同様の調査により、人工種苗は釣果への貢献度が高いこと、そして再生産に関与する可能性が極めて低いことが再確認され、放流魚としての適正が高いと推察されました。
- ・遊漁者アンケート調査では、釣獲尾数の多さが遊漁者の満足度に大きく貢献することを重回帰分析により統計的に明らかにしました。また、年代が高いほど年券利用率が高く、釣獲日数も多いことなども明らかになりました。



釣獲尾数と満足度の関係
(釣獲尾数が多いほど満足度が高い)

【期待される成果】

- ・最終年度に策定する、人工種苗を用いた漁場管理のモデルケースを普及させることで、遊漁者が増加し、漁協経営の向上が見込まれます。

【今後の計画】

- ・興津川での調査を継続し、人工種苗の生態特性の評価と繁殖実態の確認を行います。
- ・アンケート調査により、人工種苗放流がもたらす経済波及効果を明らかにします。
- ・精度の高い知見を基に、人工種苗を用いた漁場管理のモデルケースを策定します。

(作成 平成 24 年 4 月 1 日)